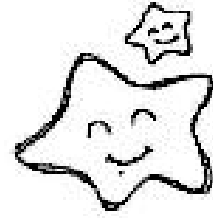


QSK にぬふあぶし

No.338

ね
子の方向の星(北極星)



「あなたの力が家族を変える」

沖縄市家族会おあしすコール 知名 テル子

1月26日、高森信子先生の講演会に参加することが出来ました。

私は20年前にも受講し、「親が変われば
子も変わる」と「I love youのメッセージで
愛の力でしか癒すことはできません」とバイ
タリティーにあふれた講演会でありました。

私は、二人の統合失調症を抱え、どうした
らこの病が癒えるのか、どうあれば良いかと
常に模索状態でした。



娘はデイケア通所し、息子は入院中で、特に息子の暴力、暴言には、家族中が
振り回されて恐怖の毎日でした。

この状況に高森先生の「I love you」のメッセージ、「愛の力」ということが私に
は理解出来ず、日夜悩みの渦の中、闇の中でした。

長い入院生活もやっと退院することが出来、この闇から抜け出ることが出来た
思いでした。今では娘も自立することが出来、A型就労で頑張っています。一方の
息子は対人関係が苦手で、デイケア、作業所にも繋がることも出来ず引きこもりの
状態です。親は老いていく中で、自立出来ない息子のことが心配で悩まされてい
ます。

今回の高森先生のお話の中で、「当事者の現在位置を確認することで受け入
れも出来、寄り添うことが出来、当事者の不安も和らげることも出来る」と、「そして
当事者は、寂しさと孤独で常に愛を求めています。だから家族は I love youで寄
り添う愛の力が大切です」 (次のページへ)

今は、受け入れることが出来ます。

この病は、脳の病気で服薬していても、全体的に効くことが出来ず、どうしても人薬と時間薬が必要とのことです。

この病は奥が深すぎて長いトンネルを潜っている状態のように思います。息子も服薬を忘れずに守っていますが、幻聴に悩まされ、毎日のように「この家が誰かに取られる、殺される、入院させられる」と不安を訴えて、なだめるのに苦労しています。私は言葉を発することなく、ただ寄り添い、手を揉み、足を揉み、さすっているうちに静かになることもあります。

私は、息子を安心させる為にも、100歳まで長生きして、共に生きることに努力をしています。

高森先生も高齢になられても、遠い沖縄まで、私達の為に支援して下さいる愛の深さに感謝するばかりです。高森先生の、健康と幸多い毎日でありますよう、お祈りしています。

「いしみね救護園まつり」に参加しました

3月8日(土)は、那覇市にある「いしみね救護園」でイベントがあり、「てるしのワークセンター」も生産品の出店販売で参加しています。救護園とてるしのを併用している利用者さんは歌や音楽のお披露目会でも活躍して、出番が終わるなりすぐまたてるしのの販売ブースにかけつけてくれるという働き者ぶり。

おかげさまで、てるしののパンも完売することができました。のどかに晴れた昼下がり、ブースに足を運んでいただいたみなさまに感謝を申し上げます。



過去が現在を照らすとき～光州の記憶と沖縄の監置小屋

理事・高橋年男

「実際、死んだ者が生きている者を助けていると感じた」

ノーベル文学賞作家の韓江(ハン・ガン)が、昨年12月、スウェーデン・アカデミーで記念講演を行った。

ちょうど1週間前の12月3日未明、韓国・大統領による戒厳令で、軍が出動し市民に銃口を向ける混乱の真ただ中であつた時に、世界に向けて発せられたライブの言葉である。人間の残酷性と尊厳が極限の形で同時に存在した1980年の光州、その時、その空間を、それとは知らずに、9歳の少女、韓江は共有していた。

45年前の光州での犠牲者を弔う詩を、韓国各地の街頭で、若者たちが歌い継いでいる。

愛も名誉も 名前さえも残すことなく
命をかけて 良心を貶めず
どこへ逝つたのか
残された旗だけが翻る
世が明けるまで 前を向いていてくれ
時が過ぎても 山河は忘れない 誓いあい 叫んだ熱い喊声(かんせい)
死んだ者が前に立つ だから
人として生きるものは みな ついて来い

荘厳なオーケストラの演奏、アップテンポなアカペラ、行進曲としても、いろんな場面で、いろんなバリエーションで、心を打つ詩である。

歴史の闇に埋もれてきた沖縄の私宅監置の問題もまた、韓江作家のように「過去が現在を救うことができるのか?」「誰ひとり取り残さない」…は本当か?と、問い続けていきたい。

監置小屋を保存する取り組みは、80年前の沖縄戦から、引き続き米軍統治下に置かれた沖縄の歩んだ歴史を照らし出すものである。

2018年の写真展とシンポジウムや地元メディアの特集などによって大きく動き出したものの、100年以上も前に、呉秀三が指摘した「この邦に生まれたるの不幸」、過去と地続きの精神保健医療が抱える闇。

優生保護法による人生被害に、最高裁が国家犯罪を断罪する画期的判決を下したが、精神障害者に対する社会的隔離に潜む優生思想の闇は残されたままだ。犠牲となった当事者と家族の、奪われた人権を取り戻す一条の光として、監置小屋保存の取り組みを、少しずつ少しずつ声を広げていきたい。

ラップ 「WRAPファシリテータートレーニングin沖縄」を終えて

2月、「WRAP(元氣回復行動プラン)」のファシリテータートレーニングが、「くる系満」にて催され、増山もサポーターとして参加してきました。

WRAPのファシリテーター資格を得ることのできるこの研修、沖縄で開催されるのは実に13年ぶりのこと。WRAPは「自分の元氣のために自分で作る行動プラン」ですが、みんなで考え方やアイデアを持ち寄る「WRAPクラス」もあって、クラスはファシリテーター資格を持つ進行役がいて開くことができます。

連続5日間、たっぷり1日中というなかなかハードな日程ながら、県内外から9名の方の参加がありました。

私も13年前に那覇で同様の研修を受けているのですが、細かい内容についてはほとんど忘れてしまっていて、1日ごとに「ああ、こんなだったかも知れないなあ」という、懐かしい感覚を取り戻していく時間となりました。さらには久留米からかけつけてくれた「津野さん」はじめ、



運営側の仲間たち一同。お疲れさまでした！

13年前と同じメンバーも少なくなくて、WRAPを通じたつながりの強さもしみじみと実感することができました。もちろん新しい出会いもあり、沖縄でもまたあらためてWRAPの輪が広がっていく新しい一歩になったのではないかと思います。

あたたかくて^{じみ}滋味深い時間にご一緒できたことに感謝です。(増山)

◎編集後記◎

小さいピンク色の多肉植物が部屋にある。鉢に「恩寵」という名札が刺さっている。奥さんがお店からこの「恩寵」を持ってきたとき、言葉にはしなかったが、ぼくはシモーヌ・ヴェイユの『重力と恩寵』という本の名前を思い出していた。読んだことはない。本屋さんで見かけるたび手に取るが、いまはタイミングではない気がして毎回棚に戻す、そういうタイプの本である。読んだことはないが、内容についてはときどき調べたりしている。だから遠縁の親戚よりは馴染みがある。こういう本との付き合い方もそれはそれで悪くない気がしている。部屋の「恩寵」を見るとたしかにシモーヌ・ヴェイユ的な顔をしていて、それも悪くない。(増山)

編集：公益社団法人 沖縄県精神保健福祉会連合会
会長 山田 圭吾
〒901-1104
沖縄県島尻郡南風原町字宮平206-1
電話098-889-4011 FAX098-888-5655
E-mail terushino@castle.ocn.ne.jp

発行：九州障害者定期刊行物協会
〒812-0068
福岡市東区社領1丁目12番4号
電話092-753-9722 FAX092-753-9723
定価：10円(会費に含まれる)